



タイトル	怖いクラシック
著者	なかがわゆうすけ 中川右介
出版社	NHK 出版新書
発売日	2016 (平成 28) 年 2 月 10 日
ページ数	283 ページ

音楽の楽しみ方には、

- ・ 純粹に作品や内容にのめりこむ方法、
 - ・ 演奏や演奏者に興味を持つ方法、
 - ・ 曲や演奏が醸し出す雰囲気味わう方法、
 - ・ 作曲家、歴史、楽器を中心に聞く方法
 - ・ 気分に合わせて音楽を選ぶという方法、
- など色々な形がある。

クラシック音楽は、いつからか「癒しの音楽」と喧伝されるようになったが、その王道は「怖い音楽」に他ならないと著者はいう。

本書は、モーツァルトから始まり、ショスタコービッチまでの曲が、一話完結の八章で纏められており、どの章から読み始めてもいいが、最初から順に読めば、音楽史が判るという構成になっている。さらには、それぞれの章ごとに主要な音楽家の略伝、交響曲や葬送行進曲、レクイエム（鎮魂歌）といったジャンルの略史も盛り込んでいる。

さっそく、目次を見てみよう。

はじめに	美は「恐怖」に宿る
第一の恐怖	父 — モーツァルトによる「心地よくない音楽」の誕生
第二の恐怖	自然 — ベートーヴェンによる「風景の発見」
第三の恐怖	狂気 — ベルリオーズが挑んだ「内面の音楽化」

- 第四の恐怖 死 — ショパンが確立した「死のイメージ」
第五の恐怖 神 — ヴェルディが完成した「宗教のコンテンツ化」
第六の恐怖 孤独 — ラフマニノフとマーラーの「抽象的な恐怖」
第七の恐怖 戦争 — ヴォーン・ウィリアムズの「象徴の音楽」
第八の恐怖 国家権力 — ショスタコーヴィチの「^{いんめい}隠喩としての音楽」
あとがき

本書では、曲名について、作曲家自身が付けた題なのか、他人が付けたニックネームなのかにもこだわっている。「ジュピター」（ホルスト）や「皇帝」（ベートーヴェン）のようなニックネームは罪は軽いものの、「運命」（ベートーヴェン）や「巨人」（マーラー）、「革命」（ショパン）といった標題めいた偽タイトルとなると、聞き手に誤った先入観を抱かせるので罪は重いと著者は言う。

本書の書名を見て、中野京子のベストセラーシリーズ「怖い絵」を思い出す人も多いだろう。勿論、この本は中野氏の一連の本からヒントを得た企画だと著者はいう。それにしても、中野氏のあのおどろおどろしい絵や写真（評者はこの種の本は読まないのに、YOUTUBEの画像を覗いてみた）と Classic 音楽を結び付けるにはかなりの勇気が必要だったかも知れない。

絵の場合は本に載せ、見せながら説明できるが、音楽はそういうわけにはいかない。本書を手にするのは、クラシックファンでしかも本書に出てくる曲なら、ほとんど知っていると思われるので、知らない人は「ネットで検索して聴きなさい」と手を抜いているのは戴けない。

絵を見るように、1冊の本で、読みながら音楽を聴く（見る）ことが出来るようになるにはあと何年待たなければならないだろうか？

さて、第三の恐怖 狂気 —— ベルリオーズ (1803～1869) が挑んだ「内面の音楽化」の部分を覗いておこう。

1930年12月5日、パリ音楽院のホールで、若い新人作曲家の新作が初演された。

ロマン主義音楽の開幕を告げる、ベルリオーズの「幻想交響曲」である。ベートーヴェンの「田園交響曲」に触発され、その発展形として登場したこの曲は、「怖さ」の点でも抜きん出ている。特に第四楽章は「断頭台への行進」と題されていて、可成り不気味な音楽である。

ナポレオンが亡くなる前後の時代に、ベートーヴェンは56歳で亡くなっているが、この大天才の後を追うようにして、後に「ロマン派」と呼ばれることになる19世紀初頭に生まれた音楽家たちが続々登場する。

ベルリオーズに遅れて、大音楽家たちが相次いで生まれた。

- ・ベルリオーズが 1803 年
- ・メンデルスゾーンが 1809 年、
- ・ショパンとシューマンが 1810 年、
- ・リストが 1811 年、
- ・ワーグナーとヴェルディが 1813 年、

である。さらに彼らはみな知り合いになり、ライバルあるいは友人だった。リストとワーグナーにいたっては義理の父子になる。こんなにも集中して大音楽家が生まれたのは、この時代しかない。

彼らと 18 世紀生まれの音楽家との違いは、「音楽家の子」として生まれたわけではない人が多いことだ。

- ・ベルリオーズは医者の子、
- ・リストは父も音楽家だったが、
- ・メンデルスゾーンは銀行家の子、
- ・シューマンは出版社主の子、
- ・ショパンは教師の子、
- ・ワーグナーは役人の子、
- ・ヴェルディは商人の子、

である。

ベートーヴェン（1770～1827 年）以前の音楽は、現在の概念での「芸術」ではなく、「技能」に近かった。音楽家は芸術家というよりも職人だった。社会的身分も高くなく、したがってわざわざ音楽家になろうという者もいなかった。

しかし、ベートーヴェンによって音楽が芸術になると、青年期に音楽と出会い、自分も音楽家になろうと思う者が出てくるようになった。その最初期の人がベルリオーズだった。

さて、「幻想交響曲」のベルリオーズ自身による解説を見ておこう。

病的な感受性と燃えるような想像力を持つ若い音楽家が、恋に絶望し、発作的に阿片^{あへん}を飲む。麻薬は彼を死に至らしめるには弱すぎたが、彼を奇怪な幻想を伴った重苦しい眠りに変えられた。恋人ですら一本の旋律と化し、絶えず絶えず彼に付きまとう固定楽想のような存在となる。

曲の 5 つの楽章にも、ベルリオーズ自身による「あらすじ」が付けられている。

第 1 楽章は「夢・情熱」、第 2 楽章は舞踏会、第 3 楽章は「田園の情景」で、ベートーヴェンの「田園交響曲」の影響がそのまま出ているようなストーリーである。第 4 楽章は「断頭台への行進」が怖い音楽である。第 5 楽章「サバトの夜の夢」もかなり怖い。サバトの夜とは、全世界の悪魔が集まる、安息日のことだ。「彼はサバトの饗宴に自分がいるのを知る。彼は、亡霊や魔法使い、あらゆる種類の化け物に囲まれている。不気味な音、うなり音、笑い声、遠くからの叫び声などが聞こえてくる。・・・・・・。狂気のうちに音楽は終わ

る。

「幻想交響曲」が書かれたのはベルリオーズが22歳の年である。まさに青春の真っ只中という年齢だ。



フランツ・リストはベルリオーズの親しい友人である。

評者は、今から10年くらい前に、NHKのクラシックの番組（ラジオ）で、ベルリオーズの幻想交響曲を全曲ピアノ版（リスト編曲：ピアノはピエール・レアシュ）を聴くチャンスがあった。勿論、その時の曲は録音して今でも大切に保管しているが、オーケストラ版のものしか聴いたことのない評者にとって、ピアノ版は何もかもが新鮮だったため、録音した当初は、何度も繰り返し繰り返し聴いたものだ。オーケストラ編成のものをピアノであれだけ表現できるのだから「すごいなあ」としばらく夢中になった。

印象があまりにも強烈だったために、無謀にも、評者もおなじ曲をDTM（デスク・トップ・ミュージック）で挑戦してみることにした。スコアはピアノ版など手元にはないので、オーケストラ版（ベルリオーズ 幻想交響曲 作品14 全音楽譜出版社）を買ってきて、どのパートをピアノで演奏するかを決めて、早速取り掛かった。といっても、五つの楽章全部を入力するのは大変なので、一番易しそうな、第二楽章の **Valse Allegro non troppo** つまり「舞踏会」のみを入力することにした。一週間後、曲は完成した。最初のうちはその出来具合に自己満足していたが、何か物足りない。実は、DTMをやっていると最初にぶつかる壁がこの部分である。

これも随分昔の話だが、何かの番組で色々な作曲家の曲をモーツァルト風に弾いて喝采を浴びた演奏家があったが、なかなか面白かったのを覚えている。

最近ではコンピュータも随分進歩して、印刷された楽譜さえあれば簡単に理解し、演奏することが出来るまでになっている。つまり今では、イメージスキャナーで楽譜を読み取ることが出来れば、音符の長短や高低は勿論のこと、フォルテやピアノなどの演奏記号も一瞬にして理解するとともに、その情報をシンセサイザーに送れば、キーボードから入力などしなくても、即座に演奏できるまで自動化されている。

これだけなら、評者がやったようにDTMで楽譜をキーボードから入力して、その演奏を聴くという従来のやりかたを自動化しただけで、本質的には変わらず、ミスタッチのない正確無比で、楽譜通りの無味乾燥な演奏が聴けるが、1,2度聴けば後は鑑賞する気にもならない程度のものでしかないのは皆さんも十分想像できると思う。

ところが最近のものは、ここで更に名演奏家が同じ楽譜を演奏したCDをコンピュータに解析させて、その結果を加味してもう一度演奏させると、今度は素人には十分満足の行く緩急自在の情緒あふれる演奏に一変するように工夫されている。

さらに、この後今度は楽譜を変えて違った曲を演奏させると、今度はその同じピアニストの特徴を表現したような調子で演奏してくれるコンピュータが現在、既に開発されている。

DTMが無味乾燥な印象を与える理由は、皆さんもうお分かりですね。それはプロの演奏を聴くとすぐに分かります。プロが弾く曲を楽譜を見ながら追っていくと、プロは正確無比ではないということが分かります。そうです、何時も全く同じ演奏をする演奏家は驚嘆されはしても名演奏家としては称賛されません。

パスカル・ロジェはパスカル・ロジェらしく、ウラジミール・アシュケナージはウラジミール・アシュケナージらしいのは、実はこの不正確さにあります。彼等の演奏が賞賛されるのは、その不正確さに演奏家独自の「ゆらぎ」があるからです。これならば、モーツァルトの曲をラベル風にという無謀な試みも不可能ではないわけです。

この「ゆらぎ」は人間の動きと機械の動きや自然のものと人工のものとを区別する重要な特徴にもなっています。

なお、評者は、最初からピアノ盤も素直に受け入れることが出来ましたが、人によっては、幻想交響曲のピアノ盤を聴くときは、頭の中をリセットしておいた方が良いかも知れません。オーケストラ盤のこの曲が染み付いてしまっている頭には、その響きとの比較になってしまうからです。

そうしないと多分、ベルリオーズのオーケストラ編成の見事さが再認識され、このピアノの響きは物足りなくなって聴こえてしまうかも知れないからです。しかし、何度も繰り返し繰り返し聞いていると、この演奏の素晴らしさに目覚めてきます。多分一度聴いただけでその印象を書くと、とんでもない酷い評価になったかも知れません。

作曲家といえば、映画やドラマではピアノに向かって作曲しているシーンがよく出てくるし、実際に演奏活動をしていた作曲家も多くいる。しかし、ベルリオーズは、プロとして演奏できるほどはピアノを弾けない。指揮はしたが、自分で演奏するわけではないので、彼は史上初の「演奏できない作曲家」でもあったわけである。

平易な文章で読みやすかったため一気に読み終えてしまった。タイトルは「怖いクラシック」だったが、「怖い」という言葉が所々に出てはくるものの、首をかしげる曲もあり、「怖いクラシック」は、最後まで「脇役」だったようにも感じられた。本書はむしろ、読み易い西洋音楽史とした方が良かったかも知れない。